

# バイオベンチャー2015 (前編)

## 特集によせて

新城 雅子<sup>1</sup>・小川亜希子<sup>2</sup>

21世紀初頭は、バイオベンチャーの起業で賑わった。しかしその後、「赤字体質から抜けられない」「日本でバイオベンチャーは育たない」という重い空気が空を覆った。当時、「基礎研究と産業を結ぶ橋渡しをする力」と「純粋科学にこだわる日本人のメンタリティー」が論じられていた<sup>1)</sup>。十余年経った2013年、黒字化したバイオベンチャーが5社に上り、明るいムードが出てきた。バイオ系の各種セミナーでも、バイオベンチャーの雄（及びその候補）達が自社技術や展望を語る機会が増えている。

生物工学会誌へも、バイオベンチャーの方からのご寄稿が増えている。たとえば、2015年6号特集では、昆虫細胞によるインフルエンザワクチン生産について、(株) UNIGEN (バイオベンチャーUMNファームグループ)の事業紹介記事が掲載されている。こうした製薬分野に加え、本学会がカバーする分野は多岐にわたる。バイオテクノロジーを活用した微生物・植物・動物細胞、農業および海洋資源の育種・プロセス開発、醸造や機能性成分に関わる食品・飲料の研究開発、再生医療につながる幹細胞やiPS細胞の活用研究開発、これらを支える技術開発・受託サービス、医療・分析機器開発などであり、本誌の読者の活躍分野の裾野も広がっている。

今回の特集では、本学会がカバーする主だった分野でバイオベンチャーを立ち上げ、今日まで事業を発展させてこられた10名の企業代表の方に、以下の5点をキーワードとしてご寄稿いただいた。さらに、ベンチャー起業・経営支援の立場から2名の方にもご寄稿いただいた。

【キーワード】1) 技術・サービスの魅力や強み、技術紹介、2) 起業のきっかけ、3) 事業のターニングポイントとなった出来事や人との出会い、4) 未来のビジョン、5) これからベンチャーを立ち上げる方へのメッセージ

本号では、植物や微生物、海洋資源や食品、環境保全やコンサルティングといったさまざまな事業分野で活躍されている6名の方を紹介する。

「近大マグロ」でご存知の読者も多いのではないだろうか。まずは、(株)アーマリン近大の取締役、村田修氏である。世界で初めてクロマグロの完全養殖に成功し、料理店経営も行うなど、生産から流通に至る全工程に携わる「海のビジネスモデル」を構築されている。是非とも、受け継がれてきた近畿大学水産研究所の実学精神に触れていただきたい。

続いては、(株)インプラントイノベーションズの代表、高根健一氏である。日本で唯一の植物関連受託開発会社である。記事を見ていただきたい。暗闇で光るトレンニアは、幼い頃に描いた夢の世界が、現実となっていること

に胸の高鳴りを覚える読者も多いのではないだろうか。高根氏の幼少の頃に抱いた夢の話と起業のきっかけ、幾度ものターニングポイントには、偶然と必然と想いととの絶妙なハーモニーがある。

産業は時として環境浄化を必要とする。環境浄化の中でも、土壌汚染に携わり、原位置浄化のバイオニアとして邁進しておられるのは、(株)エンバイオ・ホールディングスの代表、西村実氏である。起業への経緯から初受注に至るまでの奮闘ぶりは、科学技術と事業化の間の深い谷を乗り越えていく物語のようである。西村氏の経営者としてのビジョンと行動指針は、起業を志す人に限らず多くの読者への貴重なアドバイスが満載である。

今回、もっとも若い経営者達を擁するのが、ちとせバイオエボリューションである。「千年先に続くバイオ技術を創っていく」と、その社名に込められた思いは強い。CEOの藤田朋宏氏は、経営者になった経緯や、起業家として走り続けている怒涛の日々を赤裸々に語っている。躍動感とエネルギーに溢れるビジョンと、汗と努力と涙の結晶だ。それらは決して甘くはないが、読者の臍に染みわたる強烈なスパイスとなるだろう。

続いては、沖縄に拠点を置く(株)バイオジェットスの代表、塚原正俊氏である。塚原氏は起業も大きな実験であると捉え、基礎研究から製品化に至る全過程において、依頼主に寄り添い共に成長する、という独自のスタイルである。バイオジェットスの強みは、技術における守備範囲の広さと問題対応の柔軟性であり、それを支える社員のスキルに大きな重点が置かれている。その成果は多分野に渡っており、実にユニークなビジネスモデルである。

最後は(株)ファーマフーズの代表、金武祥氏である。鶏卵やバナナといった身近な食材に眠る大きな可能性に目を留め、新たな価値を創造し続け世界へと躍進している。金氏がベンチャー精神を覚醒させられたエピソードは、大変興味深い。いかにインスピレーションを形にして事業に発展させていくか、そこには起業家本人の強いモチベーションと明確なビジョンが必要だと実感する。きっと、読後に感化されて何か起業したくなるに違いない。

本特集は、ベンチャービジネスに携わる方々の血の通った言葉に溢れている。しなやかにしたたかに、しかし、誠実に生き抜かんとする著者らの姿は、読者の大いなるパワーとなるであろう。

1) 吉川弘之ら：Bioベンチャー、2(2), 29 (2002).

著者紹介 <sup>1</sup> 奈良先端科学技術大学院大学 (客員教授) E-mail: shinjoh@bs.naist.jp

<sup>2</sup> 鈴鹿工業高等学校生物応用化学科 (講師) E-mail: ogawa@chem.suzuka-ct.ac.jp